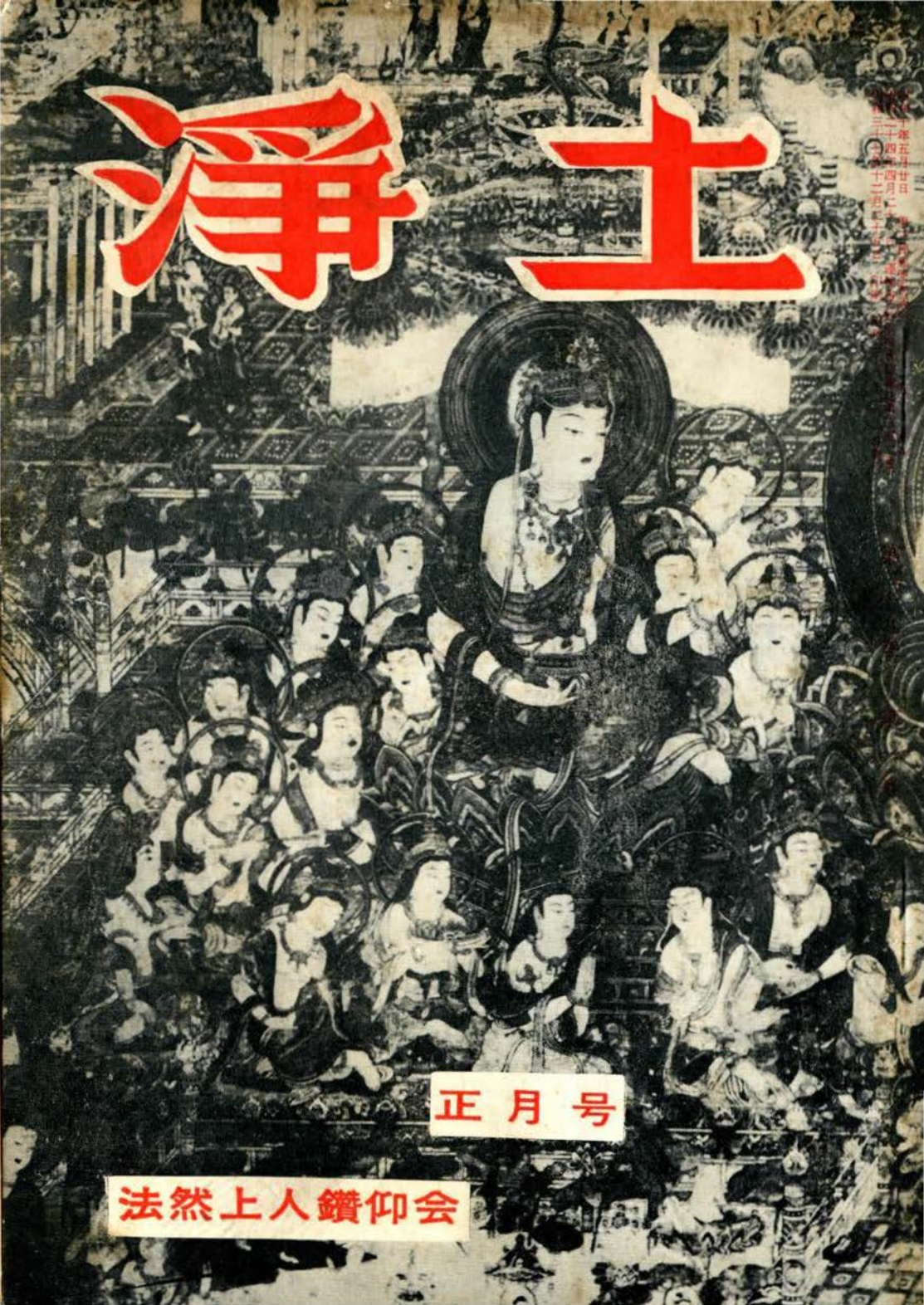


淨土



昭和十四年五月廿日
三十四年四月二日
三十四年十二月二日

正月号

法然上人鑽仰会

新版ひめくり

心のあゆみ

A判

価格 七〇円 十 二〇円

体裁 タテ 30CM ヨコ 10CM

割引 一〇部以上 一割 五〇部以上 一・五割引

送料 実費 百部以上 二割引

(百部以上より無し)

修養ひめくり

B判

価格 一〇〇円 十 四〇円

(一〇部以上より割引あり)

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町1の21

振替 東京82187 電話 (332) 5944

◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

浄土トラクト

大正大学教授・文博 佐藤賢順著

再版 信仰へのみちびき

B 六版・十六頁 定価十五円 十 十円

目次

- 1、大慈悲の仏教
- 2、知性を超えて
- 3、美的情感を超えて
- 4、本願の不思議にて
- 5、すべてを包む愛
- 6、人生は信ずる心から
- 7、お導びきのまに

二十部以上 一・五割引
五十部以上 一・五割引
百部以上 二割引

月影抄

目次

御法語の栞

B 六版・十六頁 定価十五円 十 十円

- 1、上人のご日常(われ聖教を見ざる日なし)
- 2、浄土宗の意義(われ浄土宗をたつる心は)
- 3、道を求む(かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ)
- 4、決定の信(我は烏帽子もきぬ法然房也)
- 5、弥陀名号の功德(無礙光とは)
- 6、信仰のすがた(つみは十惡五逆のもの)
- 7、念仏を勧める(不軽大士の枕木瓦石を)
- 8、あとがき

申込先

東京都千代田区飯田町一ノ二一
法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土

正月号



されば念仏を信ずる人は、たとひいかなるやまいをうくれども、みなこれ宿業也。これよりおもくこそうくべきに、ほとけの御ちからにて、これほどもくるなりとこそ申すことなれ。

法然上人御法語

目次

表紙 当麻曼荼羅 (奈良・当麻寺)

年頭所感……………椎尾 弁匡 (2)

アジアのうさぎ……………春日井真也 (4)

- | | |
|--------|--------------------------|
| 三分間話 | 念仏に生かされて……………小布施弘学 (12) |
| 教育シリーズ | 欧州の幼児教育……………山本 恭雄 (14) |
| 近現代高僧伝 | 林 彦 明……………大橋 俊雄 (18) |
| 紀行文 | アメリカ旅行(7)……………佐藤 治子 (20) |
| | 扉の御法語……………(11) |
| | 極楽浄土……………(27) |
| | 表紙の写真……………(32) |

三部経の再発見……………須藤 隆仙 (28)

編集後記……………(33)

東京都港区赤坂青山町四ノ九
浄土宗 梅窓院
電話(四〇)一三八五

年頭所感

椎尾 弁匡

(大本山 増上寺法主)

この国に生まれこの山に移るまで七十年の年月を過ごした。初めはいかなる縁とも思い定めなかったが、母のするままマンマンと手を合せた。時々母の坐る様に同じ所に坐って拝んだ。忘れもせぬが、九つの時、騒がしいのでとび起きた。お父さんは誰かと殴り合っていた。御門につつ立っている奴があった。さっそく僕の小弓を持ち出して矢を放った。うまく当たった。奴の目の所に。あとで聞けばそれは定明であつたと云う事だが、夜打に暴れこんだので何も云うてはこない。それから早くも三十余年私は薄ら覚えのお父さんの様になった。このお山でも毎日お経を読んだり教えを受けたりしても、お父さんが地獄から出て来る道がわからぬ。毎日南無妙法蓮華經と言ったり、南無阿弥陀仏とも申すが、お父さんには届かぬらしい。何の返事もない。私は何処におるのだ。このごろ時々今までもあまり見なかったお坊さんにあう。日本人ではないらしい。インド人でもないらしい。今晩はあつたら名を聞いてみよう。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏している内にあの人が出て来た。和尚様あなたは何処のお方ですと訊ねたら、大唐の善導と聞こえた、と思つたら目が覚めた。さっそく昼も読んでいた御疏を開いた。いつも云う一心専念の所が出た。ことに願彼仏願家の句が大きく見えて、たくさん

仏様が私の胸にどんどん入りくる様に思えた。咽の乾いた時お湯をガブガブ飲む様に受け入れた。それからのはいつも念仏する事になった。二十年もたってそれは大経に説く二百一十億の諸仏の固りである事が感じられた。ますます嬉しく念仏にあかし暮らした時、月輪殿によばれた。お念仏の有難い事を聞かして下さいとの事であったから、子供時代からの念仏申し来た事を申し上げた。そのうちの考えの参考になる事を書いて下さいとの事であったから、私は善導御一人の教えによっているのであるが、インド支那の人々の説かれた事や三部経の中で目に付く事を書いて差し上げた。月輪殿はたいへんお喜びになったが、世間ではあれこれ言う人も出た。善導様の礼讃を節付けて唄ったり、月影の歌を作ったり、弟子や信者の中で喜び歌う人が出来たりしたら、仏教は歌舞観聴を禁じてある。法然はその禁戒を破った等と言われ、弟子の中にも行儀の悪い者も出た為に、七十二になって流し者になった。いろいろなだめる人もあったが、七十五には小松へ流された。この事起りてより、嬉しいのやら痛ましいのやらわからぬ氣持がだんだん日本に生まれて有難かったと思う様になった。弥陀のお救いを被り南無阿弥陀仏の申せるのは、悲願のお力であり諸仏の御苦勞のおかげであると思ひながらインドでもそのお力を戴く者少なく、支那でも善導大師があの様にお広め下されても初唐と共に終わり弟子方にすら十分行き届かなかった、御書物がこの島国日本に伝わり五百年後の私が戴けたのは日本国なればこそ、八百万の神々の守らせたまえる国なればこそ二百一十億の仏様方のお慈悲も戴けたのだと喜ぶ事を忘れ、我こそ三国第一の念仏者だなどと思ひあがる時もあった。今罪人として国法により流されるのは、この国恩の有難さを心に深く感ぜしめ下さるのであり、堂上宮人等でないのに、喜び世話せられ共に念仏する有難さは、都の他ではかつてない事であった。まことにもつての他の朝恩であった。

このお喜びが私にも共感し、本年の始めに元祖より八年重ねさせていただいた老将の年頭感である。



アジアの うさぎ

今年は卯年

春日井 真也

(仏教大学教授・文学博士)
(ビスバ・ブハラディ大学教授)

昭和三十八年は癸卯年であるという。こういう年号の数え方は、上の方の字が十干で下の方の字が十二支で、あって、それらの組合せて作られた六十という数を週期とするものであるから六十干支紀年法といわれるものである。この十干の方は、昔は、現在我々が一週間を呼ぶのに日月火水という順序で呼ぶのと同じ様に、日の順序を示すのに用いられたものであるという。また卯というのは、十二支の四番目で、十二支は十二ヶ月の順序を示すのに用いられた。西紀前二〇〇〇年頃に、日没後に見える北斗七星の斗柄が丁度垂直になることを建子と称え、これが立春頃に当たっていたので、この月を年首として、二月には丑、三月には寅という風に、十二支をもって月名としたのである。

然し後になるとこれは、子月の夕方に斗柄の指す方位を子位とし、丑月の夕方に斗柄の向う方向を丑位とするという様に、地上の方位を指示することに利用される様にもなった。十干も十二支も何時頃から用いられるようになったものであるかは明らかではないが、西紀前一〇〇〇年頃には既にあったことが知られている。

ところがこの十二支に現在用いられている様な十二の動物の名をあてはめる様になったのは、秦始皇帝の前であって、大体に於て西紀前三五〇年頃のことと見られる。これはその

時代の中央の高い文化を、周辺の未開諸国へ流すための文化統一の為に考え出されたもので、今日で云うマス・コミュニケーションが用いられていたことになる。

この十干と十二支とを組合せて作った六十を周期とする六十干支紀年法は、やはりその頃から用いられていた様である。この組合せから云うと癸卯は甲子から数えて第四十番目に出てくることになる。従ってではじめて用いられてから時ながれて今日まで二千四百年以上ものあいだ引き続いて用いられ、我々の世代にさえ役に立っているということはおどろくべきことである。

勿論六十干支紀年法で用い出された頃にも、その直後の秦始皇帝の時代にも、五行説とは全く関係がなかったのであるが、漢代の初期の西紀前二〇〇年頃に至って、五行説を吸収して現代の様な意味になったのである。

五行説は戦国時代に鄭衍（すうえん）、鄭夷（すうせき）によって主張された説で、天地の間に循環流行して停止せぬ木火土金水の五つの元氣・百物組成の元素の相生・相克の関係を論ずる学説である。

そのあと十干十二支の組合せには陰陽説がからみつき、更に九星説を加えて、やがて吉凶、運勢などの多くの理由なき迷信を生み出すことになるのである。従ってもののおこりだ

けを云えばそれは単なる紀年法の一つであつたのであるから、その組合せの上には何等特別な意味はなく、云わんや吉凶・運勢などと結びつく筈のものではなく、単なる年号表示にすぎないのである。

またこの十二支に似たものに十二宮がある。これは古来から季節を知るために、太陽の位置を知る便宜上の用いられたもので、従って黄道に沿うてその両側八度の幅をもって三十度宛に区切って、その一つ一つを宮と呼んだものである。バビロニアから起つたものと云われるが明らかでない。この十二宮は多くの動物名を含んでいるので獣帯とも称せられるバビロンの十二宮は羊・牛・雙子・蟹・獅子・処女・天秤・蠍・射手・山羊・水瓶・魚の十二である。またエジプトにはこれと異つた十二宮があり、猫・犬・蛇・甲虫・驢馬・獅子・山羊・牡牛・鷹・猿・紅鶴・鰐の十二獣を数えている。これらのものとインド及びシナの十二宮は順序も名前も一致していない。

この十二宮は太陽の位置によって季節を知るためのものであるのに対して、月は恒星に対して二七・三日で一週するところから、月の運行の上に朔に於ける太陽の位置を推定して、季節を正すために考え出されたものに二十八宿がある。従って十二宮にバビロニア・エジプト・インド・シナと夫々

異ったものがあつたように、この二十八宿にもその性質は同じものであるけれどもその起源は何れであつたのか今日なほ知られていない。

この様にして人類の文化の起源をたづねるとすべて朦朧漢漠の中に迷い込んで仕舞うことになる。こういうところがまた迷信の発生する基盤となつてゐるのであらう。

さてもとにかえて卯の字について考えて見ると、この卯を兎にあてるといふことは何の理由か判らない。卯という字はウサギを意味するものでないことは確かである。兎という字の方について考えると、この字は本来は兎と書いたものであつて、これは両耳のある獣が躍つてゐる象からとられたものと云われる。しかもこの形は必ずしも現在のウサギだけを意味したものではない様であつて、春秋左氏伝などにある様に、これにクサカンムリのついた字を於兎と熟して用いると、楚國の方言で虎のことを意味したものであるという。この於兎は虎の異名としてオトではなくて鳥徒即ちウトと呼ぶべきものであると云われる。春秋左氏伝は戦國時代に左丘明の作つた春秋の注釈書であるから、西紀前四―三世紀頃の事実を考へてよいであらう。

この春秋はシナの魯の史官の手になる西紀前七二二―西紀前四八一年間のことを書いた史書で孔子(B.C.五五二―四七九)

が筆を加えたといわれている。孔子は礼・楽・詩・書・易・春秋の六経を刪述して教を万世に垂れた聖人であるが、その真面目は論語に表わされていて、怪力・鬼神を語らず、迷信にまどわされない正しい生活の基調を教えた人である。

シナ文学のうちに表われる兎は特に特別なことはない。校兎・脱兎・蹇兎・銀兎・蟾兎などという熟語は兎の性質なり形状を意味するものであるから、シナでは兎は人間生活の極めて身近かに觀察される位置にあつたものと考えられる。

「兎を得て蹄を忘る」と云う諺があるのは、丁度「魚を得て筌を忘る」というものと同一のもので、兎を得て仕舞えば最早兎を捕える網には用は無いという意味である。これに反して「兎死して狐悲しむ」という諺は宋史李全伝に出た言葉であると云われるが、それは日本の諺で云えば「今日は人の身・明日は我が身」という意味と同じである。

キリスト教の文献に兎が出てくるのを探して見ると新約聖書のうちには見出せない。旧約聖書ではモーゼ第三書であるレビ記第十一章は次の如く記している。

主はまたモーゼとアロンに言われた。「イスラエルの人々に言いなさい。地にあるすべての獣のうち、あなたがたの食べることができる動物は次のとおりである。獣のうち、すべてひずめの分かれたもの、すなわち、ひずめの全

く切れたもの、反芻するものはこれを食べることができ
る。ただし、反芻するもの、またはひずめの分かれたもの
のうち、次のものは食べてはなら
ない。すなわち、らくだ、これは
反芻するけれども、ひずめが分か
れていないから、あなたがたには
汚れたものである。岩たぬき、こ
れは反芻するけれども、ひずめが
分かれていないから、あなたがた
には汚れたものである。野うさ
ぎ、これは反芻するけれども、ひ
ずめが分かれていないから、あな
たがたには汚れたものである。
豚、これはひずめが分かれてお
り、ひずめが全く切れているけれ
ども、反芻することをしないか
ら、あなたがたには汚れたもので
ある。あなたがたはこれらのもの
の肉を食べてはならない。またそ
の死体に触れてはならない。これらは、あなたがたには汚
れたものである。」



以上は一九五五年改訳に口語聖書一四八頁に出るところであ
るが、文語体の従来 of 聖書では、らくだは駱駝に、岩たぬき

は山鼠に、野うさぎは兎に、豚は猪とし
てこれに「ぶた」という振り仮名をつけ
ている。レビ記はこのあと、「水の中に
いるすべてのもののうち」、そのつぎに
は「鳥のうち」、そのあとには「また羽
があつて四つの足で歩くすべての這うも
のは」という様な分類から食べてよいも
のと思ふべきものととの区別を行って
いる。この分類はインドの菜食主義者が動
物肉を忌避する論理とは非常に相違して
いる。

仏教經典のうちで、八楞伽經第八品に
食肉品というのがある。その中には食
肉の功德と過失とを説いている。その
根本的な理念は

「この長き世に輪廻する衆生の中にて、
あらゆる生きとし生けるものは、その
母であつたり父であつたり兄弟であつ
たり姉妹であつたり、男子であつたり女子であつたり、眷

属であつたり親類であつたりするのである。その上にまた他生をうけて転生した場合には獸畜・禽鳥・胎生のものと親類になりのである。従つて仏法を修行する菩薩は如何にして生きとし生けるものからつくられた肉を食べることが出来るようか」

ということである。これを根本にして、そこから「一切衆生を一子の如く想うが故に一切の肉を食せず、大慈悲心の菩薩は肉を食せず」という形の結論にはこびこまれるのである。そしてその時代には「犬・驛・驢・馬・牛・人間等の世間に於て食すべからざる肉が、食すべき羊肉として市販されている」と書いてある。そして正しき食物は、「秬米・大麦・小麦・綠豆・豆・小豆・酪・飴・油・蜜・黒糖・糖蜜・粗糖などによって支度せられたもの」であるという。

この入楞伽經には各品に偈頌を以て内容をまとめている部分があつて、この食肉品でも同様であつてここでは二十四偈にまとめられている。その第一偈には「酒・肉・葱を食すべからず」と述べて居り、第十六偈には「象腸經と大雲經と涅槃經と央掘摩經と入楞伽經とに於て食肉をやめることを説いた」と記している。この入楞伽經はシナには宋訳（西紀四四三年訳）・魏訳（西紀五一三年訳）・唐訳（西紀七〇〇—四三年訳）の三本とサンスクリット本とチベット本とがあるが、

インドでは世親菩薩の時代には恐らく未だ編纂せられていないで、彼の没後間もなく現われることになった經典であると思はれるから、その中に記されている肉食の風習は西紀四五世紀頃の西北インドの社会現実を伝えるものということが出来るであらう。

この經典では判っきりと「修行者は肉を食すべからず」と打ち出し、「想わず・乞われず・誘われざる三際の淨肉はあることなし。」となし「肉を食するものは最低の人である」と書いてある。従つてキリスト教のレビ記など比べると全く異つた立場に於てインドの菜食主義者の立論が主張されていることが明らかとなる。

キリスト教のレビ記に記しているところが、一見極めて客観的であつて仏教經典の方が極めて精神的なものばかりを主張している様な印象があるとするならば、それは誤解であるインドの哲学に於ては、物質即ちブラクリティはそれ自身に於て活動力を有しないから、それは精神即ちブルンヤと同時にはあらねばならないのである。従つて一方では精神的なことを主張しつつ、他方では客観に對する研究も極めて深いものがあつた。

インドの科学に於ては、一切のもののかたちを形成する要素のうち最も小さいものを極微ブラマーナと名づけたのである。

る。これは不可見のもので、従って四方とか上下とかいう六方の区別はつかないものである。これが中心になって四方と上下に六個結合したものが微塵アヌラジャスと呼ばれる。これが七個結合すると金塵となり、七金塵が一水塵となり、七水塵が一兔毛塵となり、七兔毛塵が一羊毛塵となり、七羊毛塵が一牛毛塵となり、七牛毛塵が一隙遊塵と呼ばれる。これは向遊塵とも日光塵とも呼ばれるもので、すき間をもれてくる日光中に浮遊する微細な塵の大きさであるという。ここに兔と羊と牛の三種の動物の毛塵を比較することなどは極めて興味深い。

インドではこの様に客観的觀察が深くなっている一方、同時に精神的な寛容さからであろうか、兎に角を想像することになった仏教經典の或る時期に於てはこれを亀毛兎角とならべて、存在していないものがある様に思い誤る諺に用いている。ガンジス河でもその上流の支流であるジャムナ河でもあるが大きな亀やスッポンがとらえられる。年経た亀甲には藻が生えて尾の様に毛の様に見えるこの二つを併置して用いたわけである。

インドの最も古い遺跡と云われるモヘンジョ・ダロの遺跡は今から四千年以上も前のものであるが、現在はパキスタンの一部になってしまっている。しかしここから出た遺品はい

まもインド側に保存せられていて、ニュー・デリーの国立博物館に陳列せられていて、このモヘンジョ・ダロの遺跡はハラッパの遺跡・チャンフ・ダロの遺跡と併せて、所謂インダス文明の遺構を示している有名なものであるが、一九二七—一九三一年に亘って大規模な発掘が行われて、アーリヤ民族がパンジャブ地方に進出して来る以前に、独自の発達を上げていたインダス河流域の文化の全貌を明らかにしたのである。その報告は一九三八年にマツケイ博士によって二冊の大冊になって出版せられている。

それの中にも幾つかの兎と思われる陶器の遺品があつて、インダス文化の生活の中に兎が沢山居たことを示している。しかしこのあと、所謂インド美術の盛犬期には兎のサブジエクトは見当らない。アジャンタの壁画にも、エローラの彫刻にも現存していない。この理由は恐らく、西北インドに住んでいた兎は、同じインドでも風土環境の異った、雨の多い西インドや東インドのガンジス流域に向つては自然に移動し得なかつたためであろうか。

インドの文献の上に兎が出てくるのは、最も古いヴェーダ時代のものにも見えるけれども、やはり最も大きく現われるのは、仏教時代に入ってからである。特に大乘仏教文学運動が起りはじめてくる西紀前二世紀頃からのち、しばらくの間

は、兎はその時代のベスト・セラーズには必らず現われていたスターの一人であった。「兎をもてるもの」という字で月を呼ぶ様になるのはその時代からである。

シナでは月中に兎と蟄とがいることになっているが、このうち蟄はシナ本来のものであるが、兎はインド伝来のものと考えられる。

京都知恩院の宝蔵には、俊乗坊重源上人が東大寺大仏鑄造の技法も研究するために入宋して、帰朝される際にもってかえられたのち、法然上人に贈られたものと伝える刺繍九条袈裟があつて、現在は貼付屏風の形にして保存されている。その第四条と第六条に、日輪と月輪が、五彩の線をもつて刺繍されている。その日輪の方には「三本足の鳥」の場面が二面になつて表わされている。そして月輪の方には「兎と蟄」の場面と「蟄と桂の樹」の場面との二つを出して、インド起源の兎の話が、シナで後に受け容れられたものであることを示している。

日本に伝えられている兎の伝説は、因幡の白兎などいろいろあるが、今昔物語の天竺部に出すものに、三獣行菩薩道兎焼身語という説話がある。

「兎と狐と猿とが仲良く暮していたが、或る時道心を起したそれを知った帝釈天は彼等の道心を試みようとして、老

人に化して供養を請うたのである。そこで猿は木の実を、狐は魚を取って来て供養した。しかし兎は猿や狐のように何かを見つけることは出来なかつたので、薪をあつめ、それに火をつけ、火中に飛び込んで焼死して、我が身を食に供養した。帝釈天はこれをあわれんで、兎の形を月中に移して普く人々に見せることにした。だから月の面に雲の様なものがあるのは、この兎が火に焼かれる烟であり、月中の兎はこの兎である」

この説話はもとよりインドに由来する伝説であつて、今昔物語の著書源隆国が、おそらくは玄奘三蔵の西域記の一節にもとづいて書いたものであらう。

インドのこのような月兎説話の本命とも云えるものは、パリー語の大蔵經のうちにあるジャータカ第三一六經の兎本生物語である。これの日本語に訳されたものは南伝大蔵經の第三十一巻に見られる。

またサンスクリット文学の代表的なものの一つであるパンチャタントラには、月兎説話ではないが、悪獅子を井戸に落とす兎の智慧が書かれている。

インドでこの様に、兎が大きく人間の生活のうちに浮び上つてくることは何によるのであらうか。

(筆者はインド国立ピスバ・ブハラティ大学教授として在印中)

扉の御法語

仏の御ちからは、念仏を信するものをば、転重軽受といひて、宿業かぎりありて、をもくくべきやまひを、かるくうけさせ給ふ。いはんや非業をはらひ給はん事ましまさざらんや。されば念仏を信する人は、たとひいかなるやまひをうくれども、みなこれ宿業せ。これよりもをもくこそうくべきに、ほとけの御ちからにて、これほどもうくるなりと申すことなれ。

(浄土宗略抄)

ものです。努力することも、努力できないことも宿業です。器用不器用もその人の宿業です。従っていかに身体が健康で、養生を怠らぬ人でも病気になる事があります。しかしお念仏を申している人なら、お護り下さる仏さまの力で、極めて軽い病気で済みます。少なくともこのように信することができます。お念仏を申す人がその人の罪でもないことに逢うわけがありません。従つてもし病気になるたら、早く医師の診断を乞い、それを信頼し、心を平穩にして治療に専念することができ、心をするからこそ病氣の方で早く治つてくれるのです。

あみださまの本願を信じお念仏を申しながら生活する人の毎日は安穩であります。なぜならお念仏を申す人に対しては、その人の行住坐臥にも、昼となく夜となく諸々の仏さまが圍繞なされ、お護り下さっているからで

「浄土宗略抄」は、鎌倉の二位の禪尼の要請によつて書き送つたもので、簡單明瞭に解り易く浄土門が解かれています。その内容は安心實行を説明したのですが、最後にこの御法語があります。

す。どんな悪鬼悪神といえども、これらの仏さまにかなうものはありません。そこで本来なら重なるものでも、これを転じて軽いものとして下さるわけです。

一つの世でも人を最も悩まし苦しめるものは病氣です。この苦病から逃れんとして、多くの人はあれこれ迷うものです。しかし上人は病氣はいかに神仏に祈つても決して治るものでないと言われました。このことは当時

すべてのことは宿世の因縁によつて生ずる

加持祈禱によつて病氣を除くことが一般の風習であつたことを考えると、すばらしい宣言であつたと思うのです。「いのるによりてやまいやみいのちものぶる事あらば、たれか一人としてやみしぬる人あらん」と申されています。今からすれば当然のことのようでもあります。人間の弱点に対して力強く否定したことは、上人の信仰というものに對する態度をよく現していると思われるべき大切なことなのです。信仰は医療に關係があるわけがなくもつと人としての奥深いところの問題だといふことであります。

よく世間には非業の最後等といつて、宿業

形にそう如く付き添つて護るをかうむる。これはこれ現益なり」のお詞で、平生の生活は十分安穩でいられます。「とてもかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなき」こそ、念

念仏に生かされて

小布施 弘学

(長野・長明寺 住職)

法然上人のみ教えの結集するところは、御

遺訓に示された「唯一向に念仏すべし」であり、此れが浄土宗の命脈であります。

其の念仏は、成仏の手段でなく、南無阿彌陀仏と称える念仏そのものが救いなのであります。

唯申せ 申せの唯は 唯ならず

仏の慈悲の こもる唯なり

心に仏の本願——我が名を称えよ、我れ必ず汝を救はん——を深く信じ、口に南無阿彌陀仏と称える、念声一致が現当二世の幸せを受ける唯一の道であります。

六字分明して声決定の念仏を、今日私達の生活に頂いてみたいと思います。

先ず第一に、声は思想を統一する力を持つ

ております。

法然上人の御歌に

池の水 人の心に 似たりけり

にこりすむこと さだめなければ

と、散乱し、動じ易き心を歎いておられます。

又、斯くすれば、斯うなるものと 知り乍

ら、不覚の道に迷いぬる哉、の故人の歌のように、善と知って、善を為し得ず、悪と辨えながらも、悪から遠ざかることがなかなか出来ません。

全く人の心は、浮き動き易い「浮動」であ

って、喜怒哀楽の波間に漂う小舟にも似て、

危険極まるものであります。其れに反して、仏様の心は、動かさるこ

と大磐石の如き「不動」であります。

この人間の浮き動く「浮動」の心を、動か

さるみ仏の「不動」の心に、南無阿彌陀仏と称えて、結び合せてゆくことが、念仏の信仰なのであります。

つなぐなら つなぎ処に つなぐべし

つなぎ乍らも 船は動けり

船を停泊させるには、錨をおろしたり、埠

頭の杭に繋ぐおぼえありません。

然し、繋いだからとて、波間に浮ぶ船です

から、一と時も鎮まっておりますが、流

れたり、転覆する心配はありません。

丁度、私達が口に念仏を称えておりまし

ても、心は煩惱の波に動揺しております。

果てしなく起きて止まない、雑念、妄念を

南無阿彌陀仏の声に振り捨てて、仏心に近づ

けさせて頂きたいものであります。

法然上人は「大念は大仏を見、小念は小仏を見る」と云われました。又、高声念仏をお薦め下さいました。

小さく低い声の念仏より、大きく高い声の念仏の方が、み仏のお心に叶うのであります。

実に、南無阿弥陀仏のお六字は、私達の心と、み仏の心を結合させる、摂取の糸であります。

私達の称える一声一声の念仏に应えて、み仏は私達を、その慈悲のみ胸に、たぐり寄せて下さるのであります。

念仏申すこの声は、私の計いでなく、仏様の思召であります。

次に、声は私達の身体より外に出るものの中で、一番美しいものであります。

早乙女や、汚れぬものは 声ばかり

田植する女性の頭から爪先まで、全身泥にまみれても、口より出る歌声は、少しも汚れてはおりません。

この機身より出づるもので、一番奇麗な此の声で、み仏の名前を、南無阿弥陀仏と称えさせて頂くのであります。

むさぼり、怒り、愚痴の三垢によこれた泥凡夫の称える念仏でも「我れ嫌はじ」と聞き給うのであります。

私達は、此の口に念仏を申す以上、どうか人を誨るまい、怒るまい、愚痴こぼすまいと心掛けなければなりません。

心には よしなきことを 思えども

口に六字の み名を称うる

お互は凡夫ですから、思うまいとしても、人知れず心に、悪しきことを思いましよう。

思い内にあれば、色そとに出る、ですから其れをすぐ顔に出して気色ばみ、言葉に表わして、雑言悪口を致します。

信仰は心のブレーキです。

若し心に、よしなき思いが起きたら、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と称えて口業を整え、身業を修めたいものであります。

最後に、声は私達の意志を表示するものであります。

手振り、手真似では充分に、自分の意中を相手に伝えることが出来ません。

日本は、言葉のさきほう国と云われ、言葉には神秘的な力があると信じられ、言葉の豊かに咲き榮えておる国なのであります。

言葉は、万物の霊長たる人間にのみ与えられた特権であります。

又、声は暗夜に通ずと云われますから、闇

でも言葉によって意志の交換が出来ます。

煩惱の闇夜に住む私達は、み仏を拝むことは出来なくとも、私達の称える念仏は、必ず仏様のみに通うのであります。

心に教はれたいと願うならば、其れは口に仏名を称えることであります。

母親に抱かれたいと赤ん坊は、オギャーと泣くのであります。お母さんと呼ばなくとも、ママと云わなくとも、オギャーの泣き声の中に母の救いが含まれております。

自力の修行を積まなくとも、南無阿弥陀仏と称える声の中に、仏の取摂護念が確証されておるのであります。

念仏を称えて、み親の胸に抱かれてゆくことが、人生の苦悩と、悲哀と、恐怖から救はれてゆく絶対安心の境地でもあります

朝夕に 口より出づる 念仏は

此処におるその 親の呼び声

み仏の招喚に应えて、愈々お念仏を喜びたいものであります。

了

欧州の幼児教育

山本 恭雄



写真、鳩の水呑場。

——ケルン——

観光バス

日本の観光バスのつもりでヨーロッパの観光バスに乗った私は随分変わった印象を受けました。

概してガイドも若い女性は少く、老人や中年婦人が多く、車内の解説が極めて少いのです。又歌を唄ったり車窓の景色の解説も僅かで、目的地で紹介する説明も要領本意なので、どうも不愉快なので、彼地に永らく住ん

でいられるKさんのお宅を尋ねた時にこの話をしましたら、

「それは外国人はバスに乗り乍らでも、詩やうたをつくったり、自分で観察して考える訓練が出来ているから、必要以上のことは話さないですむのです。」という意味のことを話されました。

確かに自分で努力する訓練（しつけ）が小さい時から養われているということが伺われるのです。

ベルリンのオリンピック競技場へ行った帰りでした。なめらかな坂で百米以上も競技場の前にあるのです。

そこへ自転車に乗った女の子（七、八才位）が母親に連れられてくるのです。母親は乳母車に小さい妹さんに乗せています。可愛い風景に、一つ写真をとらせて頂こうとカメラに手をかけた時に、母親は何から一言二言口にしたと思ったとたんに女の顔を二三度たたきました。察するに自転車で坂道はくたびれるといっていたのかもしれない。

母親はそのまま乳母車を押して今迄より早く歩き出しました。暫くの間泣いていた娘は一生懸命又ベタルを押しはじめました。

上り坂の為思うように昇れないのです。母親は一、二度振りむいて大声を出していまし

たが、あと二十米位という時になって、今度は逆にもどつて来て娘の背を片手で押しはじめ、「よく頑張ったね」と賞めているらしい様子なのです。子供も元氣を出し、又もとのなごやかな風景にもどったのです。

頬をたたかれた心の傷跡も最後に背にかけられた母の温かい手で治されて、ただ努力したという自信がその子に残ったことであらうと、みていてほっとしたものでした。

乳幼児期は日本では随分とちやほやして、大人の玩具のように、又何でも思い通りさせてやるという家庭が非常に多いようです。その為になかなか自立性がつきにくいし、年寄っ子、一人っ子に問題をもつ子の多いなどといわれるのをみてもわかります。

一方日本の観光バスでもその通りで、唄やジュッシャーでお客をあきさせない、丁度子供を甘かすように考える暇すら与えないのです。そうさないと満足しなくなるのと、幼児期に原因があるように考えさせられたのでした。

あふれた自信

ある幼稚園を訪れた時でした。幼児達が、一言も話をしないで先生の話を聞いているのです。概してどこへいっても子供達はおとなしいのですが、何故だろうと一寸尋ねてみま



幼稚園の遊び——私は美容師——コバンハーゲン
日常生活風景が実際に体験できる。

しそれが押えつけられていたのではと心配でした。その後数多くの人々に接するうちにそれが解る様な気がしてきました。

政治家や経済人、又宗教家や教師に逢つてみても、どこかあふれた自信があるように思えました。良否は別として、例えば教師なら、自分はこうしてきました。みなさんもこうしなさいと信念をもっていますし、親達も又同じように子供達を導いているのです。

祖父も父も自分も又子供も〇〇大学という自信をもった人も多いようです。

なかなかむずかしいことです。

日本では苦勞し貧困に耐えた人は、苦勞人と呼ばれ、社会人として役立つ人といわれていますが、一度地位や名譽を得た彼等は、果して自分の息子か娘に、自分の生涯を手本とせよと申すでしょうか。申すには申すのですが、いや少しでもこの子には樂をさせてやりたい。自分の小さい時はこんなものも買ってもらえなかった。あれも溜えなかった。と何でも買与え、よい大学へと親心は有難いことに尽くる所を知らないのです。

「教師は無駄なことは申しません。だから話は子供達にとって聞く義務があります。」というのです。ごもっともな話ですが、しか

その様に育てられた子供達は勿論、一人前

になるとやはりいつか反省するものです。

随分小さい時は甘かされた。幸だったけれども、自分を考えると何かものたりない。自分の子供には苦勞をさせ、耐える精神をつちかわねばと親心をめぐらします。

今度はその子供達は親達の育ちに比べて、自分に満足を与えないのかと反抗的になり、三代目の色々な型が生れてくるようになっていくようです。

それは偉人の孫や子又周囲の人をみても想像にかたくないことです。勿論それが全部とは申せません。良識ある方々も随分多いことです。

教師も親も宗教家も政治家も、自分をみよと体を正してことに当たっている外国の方々に接すると、親達が育児ノイローゼに、教師にしても日々を追われ、自信も失症になっていると思われる我国の人々に随分あうのです。

あふれた自信それは一言の言葉の中にさえ味えます。人造りは機械造りではありません。深い思慮と愛情がなければならぬので

す。

犬の小便

ヨーロッパから帰国された人達は、公園の美しさや、社会道徳の行届いたことに驚き、何よりまずそのことを話されます。

雀や鳩にも町の人々がベンを与えており、



家族連れ、ロンドン。
人の和が人を育てる。

焼鳥にと思う人は一人もおりません。

「日本の雀程小さい雀はいません。大切にして下さい。」と親日家のロンドン大学のあの教授は話して呉れました。

公園の芝生には「芝生に入るな」と書いてありません。「犬に小便させるな」と書いて

あるのです。このことは何を物語っているのでしょうか。

公園はしつけの場、社会訓練の教室である人々は理解しているのです。

親自身、ちり紙一落枚さぬよう気をつけていますし、小さい幼児にもそうさせています。家族連れで、池の子鴨や魚たちに餌を与えている風情や、町の中に鳩の為に作られた水呑場。アテネなどは公園の立木の根元には、大理石の溝がつくられ水が流れてくるようになっていきます。

公共物を大切にすることを旅行者の我々もその場を通して教えられます。ですから幼ない時からこの様な所環境で育った子供は、美しさが身についてしまうのでしょうか。

さて、今迄に述べてきたことは或意味で旅行者の偏見かも知れません。しかし幼児として社会人の一員としての要素をもっている為に、社会に通用出来る性格形成がどの様に養われているかという点から考えて、目にふれた一、二のことから拾ってみたのです。

欧州の幼児教育

さて欧州の幼児教育と申しても、国は多く、長い歴史と伝統によって培れた国民性や政治形態又氣候によって随分と違いますし、一方家庭教育施設での教育、社会での教育と見方も沢山ありますから、それぞれを理解してからでないと本当のことを申されないので。しかし次のことは申されましょう。

健全な両親のもとで育てられているということ。私の出席した OMEP 機構（国際幼児教育会議）で、ベリ・アカデミイ教育心理学研究所のアンドレ・ベルジュ博士は「大人の理解ということについて」という講演の中で、

「よく理解されて育った子供は大人になってから、他人を理解することが出来る様になる」と申していました。

デンマークなどは、社会的に私生児が多く問題になっていますが、その対策として、母

親を子供と共に一定期間（二年）施設に入れ、乳児期は母親の愛と責任に於て育てる様指導し、その間に保育に対する知識を与えられ、その後は子供は施設へ、又母親は幼稚園などの施設で働ける様にしています。私の訪れたコペンハーゲンのある幼稚園でも、この様な方が働いておられました。



雀に餌をやる婦人、ロンドン。
おりのない鳥小屋で自然を愛する。

について「頭を使って目と耳を働かせる教育から、手を同時に使うよう考えている」と話して呉れました。世界的傾向ですが子供の成育度が早いので、いろいろと小さい時から配慮され、施設には多くの道具と教材が置かれていました。

ある人は国際的アイデアが必要です、といわれていました。

各国を訪れて、やはり一定の水準に達した国では教育や考えは変わらなくなってきたというのを感じました。教育制度内容にしても随分近いものがあります。

ただその国の風土や歴史によって養われている要素（国民性）を早く、身をもって消化するのは幼児期です。ですから、各国共に一生懸命に力を尽しています。

最後に申し上げられることは、保育以前の問題、即ち幼児の生活総てが幼児教育であるということ、その様なことが自然に身につけていることです。即ち頭につく教育より体につく教育なのです。

それは子供の問題でなくして親自身の問題として解決されているということです。



近代高僧伝

林彦明

大橋俊雄

鈴鹿の山系が琵琶湖に接するところ、湖東平野の一角栗田郡葉山村六地藏に、彦明が林太七の次男として生れたのは明治元年五月のことであった。維新の波はいずれも同じく吹きすさんでいたが、何にしても近江の国は仏縁の地。八歳のとき誓光寺に入り明山について出家し、同十六年には西部大学林に学び、更に上京して宗学本校で唯識を専攻して、二十七年首席で卒業と同時に助教に任ぜられたが、「今まで君僕でやってきた同窓生を、すぐ先生と仰ぐことはできない」といって就任をこばもうとするものがあった。そのため登壇することなく、意を決し、出でて従軍布

教師となり、帰国後伊達内局の録事に就任、二十二年には宗学部長となった。以来四十年まで十余年にわたって宗門教育のために大いなる手腕をふるうことになった。浄土宗全書の発刊にしても、仏法の統制にしても、将又留学生を外国におくって人材を養成しようと企てたのも、一に彼の卓抜した識見にもとづくものであったという。

その間三十年三月には讃岐の法然寺を董じ、翌三十一年八月第六教校長に転じ、沼津の乗運寺に住したのは三十五年十二月のことであった。一時は宗政面にたずさわったといっても、こよなく学問を愛した彼は、ひと時

たりとも学問をすてることにはなかった。「元祖さまは木曾義仲が京都に乱入したときしか、聖典を披らなかつたことはなく、一生を通じて聖典の研鑽をつまれば、怠たることはなかつたといわれる。上人の法裔である私たちは、その法躰をしたって、一生の間どんなに寺務が繁忙であらうとも、終生日課として、たとい数頁でもよいから必ず宗典を読むようにしなさい」と語られたことがあつたほど、彼自から常に本を手からはなさず勉強していた。その生活は研究三昧といつてもよいほどであつたらしい。側近の人が「よくも頭がつかれないものだ」とおどろいた程に熱心に読書し、読んだあとは便箋に要点を抜萃してつねに整理していられた。昭和三年には専修道場の上首となられたが、このような毎日の読書と整理が行われていたればこそ、彼の緻密深遠な講義は醇々として説かれ、多くの人たちは力強いひびきをもって聴聞することができたのである。彼の最も尊敬していたのは法然上人であり、二祖三代の祖師に対してはあつち敬意をもつて接していた。選択集の校訂にしても、末代念仏授手印にしても彼は

常にその中心となつて、校訂に従つていたのであり、この昭和新聞本は原本にあつて厳密に校訂をほどこしているために、後世の学徒は誰人であつても此書によって研究をすすめなくてはならないほど貴重なものになつてゐる。

その後同十三年三月古稀の記念として三巻七書が校訂されて出版されたとき、古稀記念の意味をはつきりさせるためにも、又学界の通例としても写真のせたいものと関係者は願つたけれども、彼は「祖師の御書物を出すのに、我等ごときの写真をのせるなどということとは祖徳を覆うものだ」といつて決して許されず、名前を記されることすらも、「神聖な伝書の出版に私の名前など入れないほうがよいでしょう」といつて、極力さけておられた。しかし「私たちは先生が校訂されたということは存じておりますが、後世になれば誰が校訂したかもわからなくなりますし、それに又真实性も疑われるようになっては固ります」という哀願に、ついに折れて不精無精に奥書に名前を記されたというほど、彼の念頭にあつて去らないのは祖師ということであつ

た。従つて祖師を呼びつけにすることはなく「鎮西さま」「記主さま」と尊称をもつて呼ばれていた。

彼が百万遍知恩寺の法燈をついだのは同五年十月のことであり、翌六年には京都大学文学部の哲学科講師となつたことで「日本浄土宗史」を講じたけれども、彼の最も専門とするところは唯識であつた。彼は終生学問の道にいそしみ、専修道場を開いて上首となつたのは六十一歳の時のこと。同七年四月には大僧正に叙任されたが、彼の百山での在山は僅か四年にしかすぎず、九年六月には法王の地位を去り、その後は専ら無位の宗教人として東亜の親善は仏教同志の結合によらなくてはならないことを強く主張して、日華仏教研究会をつくつたり、又中国から同志を迎えたり、自から彼地に渡つて意見を交換するなどして日華の和平提携のために一身をささげられた。太平洋戦争のさ中、彼が「こんな不幸な戦争をのりこえて、日華の国民が慈心相向、仏眼相看の交わりを復活させるのは、もう政策ではだめだよ。政治や利権をはなれ純學術研究と信仰とだ。とくに両国に共通

の根をおろしている仏教を通じて、中国知識人の魂をゆりうごかすことだ。これが現在のわれわれ仏教徒に課せられた最大の使命だ」と申されていたというのも、日華の平和をたもつためには仏教が如何に大きな役割をはたしているかを、両国の知識人に認めてもらいたいという念願からであつた。しかし彼の考へとは逆に戦争はますますはげしくなり、将兵たちの中には暴挙をあえてする人もあるなど、和平は遠い夢になつてしまつた。昭和十年以来幾度びか中国に渡り、十八年九月には浄土宗支那開教総監として赴任したが、二十一年一月蘇州で病を得、自坊に帰リ静養するうち、七月戦災のため自坊は焼失してしまつた。病臥の人となつても脳裡に去来したのは学問であり日華仏教であつた。このことを終生の目的としながらも、果しえぬさびしさは如何ばかりであつたらうか。

かくするうち死のいよいよ近づいたことを知つた彼は、全身を水できよめ、二日夜念仏しつゝ九月九日安らかに安養の浄土に旅たれた。時に世寿七十八、法名を香譽上人様樹彦明大和尚という。

アメリカ旅行 (7)

佐藤 治子

指揮者ミンシュ代と鉢合せ

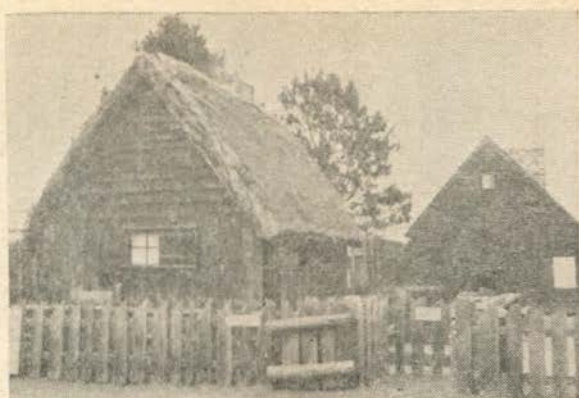


写真 プリマス。メイフラワーにて最初に移住した人の住居として史跡保存になった。

ボストンへ着いた日の翌朝、朝寝ほうした私達三人はブランチ（朝飯とおひる飯を兼ねてのお食事をランチと云う）をすませ、ジョンの車で市内へ出かけた。ハーバード大学のクープと云う共同組合へ行った。一階、二階とみて歩く。学生が一杯来ていて買物をしている。本、レコード、雑貨と何でも売っている。それから車を郊外へと向け、マンチエスターや漁業の町グロンセスターを通りロックポートへ行く美しい小さい港に裕福な人達のヨットが沢山つながれている。小さい湾が名の通り大きな岩を積み重ねた突堤でかこまれている。真青な海の色と真白なヨットの美しい秋の日ロックポートの景色はあざやかに頭の中に浮び出て来る。ボストン郊外のドライブを楽しみジョンの家へ戻った私達は急

いで着替えをして、待望のボストンシンホニオーケストラをききに出かけた。

ジョンの友人夫妻も加わって夕食をレストランで済まし劇場へ行った。私達の席は二階の御定連の席であった。二年前日本を訪れた時日比谷音楽室でこのオーケストラを聞いた私には本場できかれると思うとわくわくとうれしくてたまらない。すばらしいチェロ奏者だなと思った人の顔も見える。この夜のチャイコウスキーの「悲愴」のすばらしかったこと、興奮して拍手の渦の中に暫く立つことが出来なかった。静かに立去る人達のあとに続いて立たうとするジョンが「一寸そのまま待っていて」と云う。私は前の列にいたスミスさんと云う人に紹介された。この人はボストンシンフォニーを維持する会のメンバーの一人だそうである。そしてこの人を介して何と指揮者ミンシュ氏に紹介すると云う。思いがけない計画を知らされたのである。

人影のない長い廊下を通り二人につきそわれて行く私。ふとふりかえると、一緒に歩いて来ていると思っていたマリオンは友人夫妻とむかうの方で立っている。「どうしてマリ

オンは来ないの」とジョンにきくと「指揮者は疲れているから遠慮して、会うのは貴女だけ」と云う。アンコールアンコールと何度も指揮者をステージに呼び戻したり、感激は結構だけれど気の毒になってしまう位往復させられたあげく一曲又演奏しなくてはならなくなる日本の音楽会の事が浮び出て来る。こんなチャンスのをがさずついて来てサインなどのむ人もあるのにと考えてしまう。「疲れているのに会っていただけのの？」と私はきいた所がちゃんと話してあって待つて居れると云う。

ドアを開けて中へ入る。広くて静かな部屋の中ほどに、ふかふかとした椅子にミンシュ氏はかけている。二三人の婦人と二人の男の人が少しはなれて立っていた。私をみて先生は立上られた。スミスさん、ジョンと二人の紹介に握手しようと手をさし出された。思いがけないこの面会に感激してしまっている私が日本式におじぎを軽くし乍ら握手して頭をあげたとたんコツンと先生の額と鉢合せしてしまった。皆思わず笑いころげる。先生も私も「これはどうも失礼を」と頭に手をやり、笑

いを押え切れずわび合ったのである。背の高い老指揮者は、日本でおぼえたにちがいない日本式おじぎをして下さったとは思ひもかけない事であったので、知らないで頭を下げた私は先生のひたいとぶつかったわけである。きつと丁寧におじぎされたにちがいない。部屋の中が一べんに和やかになってしまった。

先生の汗ばんで居られる御顔に長居は禁物と思い「すばらしい音楽会でした。東京で何ったベルリオースの幻想曲のすばらしかった事を忘れられない私にこうして親しく御会い出来る事が出来、忘れられない思い出となります。御疲れの中、会って下さって本当にありがとうございます」と挨拶し、何か云われている先生に「それでは、御元気で」と云っていそいで部屋を出たのである。

部屋を出たとたん男の人二人と私は顔を合せて笑いころげてしまった。遠くで私達を待っていた三人は一体どうしたのとあやしみつつ近よって来た。「治子と大指揮者と鉢合せ!!」とジョンが笑いも止らず云うとそこで又皆一笑い、「これはすごい」「ミンシュさんと鉢合せしたのは治子だけだ」とか皆に

からかわれ笑いの止らぬ顔でこの劇場を出たのである。音楽ファンの一人としての私の忘れられないボストンでの思い出である。

ハーバード大学と学生

ボストンは日本で云うと京都の様な感じであるときかされていたが、全く古い都と云う印象を受けた。ニューヨークとはちがった建物自体から古めかしさをただよわせている。ジョンの家の近くでも、又一寸出かけるとハーバードの学生らしい若人が町を往来している日曜日ではあったがジョンの案内で大学構内を歩くと芝生にグループが何か話合っている。国際問題を話し合っているとジョンが云う。静かな構内はあまり人がいない。礼拝堂の外側の丸柱にあらに一人、こちらに一人とよりかかって数人が勉強している。さまたげない様の中へ入ってみる。いわゆるミッシェンスクールのチャペルと云った感じである。それから図書館に入ってみた。学生が沢山いる。足音をしのばせてそっとのぞいてみた。日曜であるのに、このわき目もふらずに勉強している姿をみて、決してアメリカの学

生達はデイトしたり楽しんでる人ばかりでない事をみた。大たい北部では学生は自分の車をもっている事などあまりえげないらしい。デイトしたりする時、ドライブしたりする時は車をかりて行く連中が多いと云う。そう云われると、テクテク歩いている学生や、自転車にのっている学生にボストンに来てずい分出会わした。学校へ入ってからの勉強は中々大変なものだそうである。

次男の友人でハーバード大学に來ている人に是非会ってほしいと云われていたのでニューヨークとワシントンの中間位にある町の事故、ニューヨークへ出て来ませんかとききあった。それをマリオンに話した処「勉強している人を三時間もかかるニューヨークへ出て来なさいなんて云う事はとんでもないことだ。治子は学生の勉強ぶりを未だみてないからだ。ワシントンのかえりにその大学へ連れて行って上げる」とマリオンに半ばしられてしまった。果して、ニューヨークに出る事は不可能だと云う手紙が来た、その中にもかいてあったし御会いした時に「皆朝の二時まで勉強しています。まして語学に不自由な私にとり、

とてもおつつかないから三時頃まで起きて勉強しています。こちらの学生は実によく勉強していますよ」と話された。外交官補であるその人は語学も一応出来るはずであるのに、その人でさえ語学が不自由という。日本人であるからと講義をゆっくりしてくれるわけではない。

特別に出来る人は別として、留学するなら少し語学をみっちりとして来てほしいと話してくれた二世の人もいた。

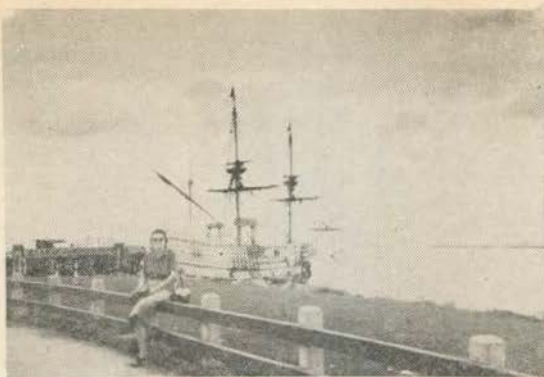
日本から留学する人達は「読解力があるからかんべんして上げよう。講義は分らなくてもペーパーテストだけで」と云うことになっているがこれが段々許されなくなってくると思う。言葉が下手だ。英語だけをしゃかりやうて来てほしい」とコロンビヤ大学に留学した人が朝日新聞語学留学生座談会に出席して話をされた事をよんだ。私も特別語学力のある人を知っているがそう云う人は本当にまれらしい。

日本人はむずかしい言葉を使いすぎる、とは向うの人達がよく云うが、留学するからにはその両方（講義をきく力と意見をのべられ

る力）が必要なのである。日本人がクラスにいるかうと講義の調子をゆるめてはくれないのだ。アメリカへ留学したものの、慣れるまでに四五ヶ月はかかると云う。私の様な気らくな旅行者とはちがいノイローゼを起こしてしまう学生さんもあるとか。只アメリカへ留学してくればと云う甘い考えは禁物である。

ハーバードの全学生が全部まじめに勉強しているかどうかは知るすべもないが、あちらでは大学へ入ってからの勉強はものすごくすると云う事は兼々きいていたが、町を歩いている学生達や、日曜日の構内に、図書館にちらとみた学生達の態度に勉強ととり組んでいる真剣さを感じたのである。なお、アメリカには名前が日本に知られていない大学で学生の人数は少いが、高く評価されている大学があちこちにあると云う事を知った。あちらの大学の授業料は高いそうなのでアルバイトをしている学生がずい分いるときいていたが、ボストンでもスーパーマーケットで土曜日のせいかも知れないが学生がずい分沢山働らいていた。白い上着をきて働らいている学徒の姿は明るくて感じがよい。

アメリカで工科では一番の大学と云われているマサチューセツ工科大学もボストンにあるし、大学町に近いジョンの家に四日も滞在したこと故、本当に学生街と云える位住宅



プリマス。メイフラワー号を背景にして

街で町角などで往来する学生に行きあったのである。ボストンだって下町もある商業街もあるが東京大学の構内やお茶の水あたりのふんい風に似て学校が或いは学生がつくり出す

空気がニューヨークのビジネスの大都市とは全くちがったふんい気を感じさせるのである

ボストン博物館

ボストンの下町をドライブしてみせてくれたかえりに博物館に寄った。ここには日本からもつて来た仏像やかけ物などがざられているのでジョンは外国でそう云うものをみるのになつかしいだろうと私をその一部屋に案内してくれた。ところが仏像のかざられてある一室は入室禁止で網が入口にはってある。

いかめしい顔の守衛は駄目ですと云って、入れてくれない。ジョンはこの人は日本のお寺の奥さんだから特別に見せて上げてくれな

いかと丁寧にたのんだが「ノー」の一点ばりである。ニコリともしない。さつとジョンは立去って足早にどこかへ行ってしまった。マリオンに「もう結構よ、行きましよう」と袖をひっぱる様にしたが、マリオンも「まあまあ一寸待ってましよう」と云って動かない。暫くすると電話のベルがなってその守衛は何か云われたと見え、綱をとりはずして、「入りなさい」とつっけんどんに云った。足早にジ

ョンがニコニコ顔で又戻って来た。中へ入った二人はお仏像に合掌してから見入っている私のうしろに立っている。そして一巡し乍ら私の浅い知識乍らこれが鎌倉時代に作られたお仏像とか、奈良時代云々と話す私を改めて認識しなおしたのか出口へ立ってしうい顔を

して見ていた例の守衛も有難うと云って出る私に今度は軽く頭を下げ「どういたしまして」と云った。きっと日本人にいやな思い出があったのかも知れぬ。でも確にお寺の人らしいと考えなおしたのか知れぬ。私はやたらに見に入るとお仏像のお手などいたむと思っ

博物館を出たのであった。ジョンが丁寧に理由を話しても「ノー」の一点ばりでニコリともせず、どうしても中をみせなかったのか理由も話さなかった守衛はよほど変人であつたらしい。と云うのは、他の部屋に立っている守衛の人達に日本より来た物を展覧してある部屋は、とたずねるジョンに、皆私をみてニコヤカにあらにありますが、ここを廻つて向う側ですよとおしえてくれていた。何のわけも話さないで「ノー」の一点張りのこわい顔をしていたこの老守衛の態度は、美術を愛好する人々にはうなづけないものがあつたのである。

そして私にはたった一人のこわい顔をみせた米国人でもあつたのである。

プリマス

アメリカの人達にとっては忘れられない地名である。メイ・フラワー号にのつて最初の移住者が一六二〇年上陸した土地である。秋の日を浴び、三々五々と人々が歩んでいる。上陸した当時のおもかけを残す小さい小屋の中で昔のままの衣装をきている婦人達が

土産物など売っている。メイ・フラワー号と云う小さな帆まゑ船も港につながれている。アメリカの人達には感慨無量の思いでこの船を眺めるにちがいない。ここまで行く旅行者は少いと思うと私はちがつた意味で無量の想いである。そしてケープ・カッドと云う岬を一廻りしてケネディ大統領の別荘のあるあたりを遙かに見てボストンへ戻つたのであつた

ニューイングランドへ

ジョンの家へ四泊した私達はアーサードリトルと云うジョンが勤める会社を見学してから、ジョンに見送られ小雨ふる中を北へ向けボストンを立つた。曇つていたのでニューイングランドの風景は物淋しい。遠山も低い雲

におおわれあちこちにある湖水も冷い感じがする。ニューハムプシヤ州に入ると白樺の並木があつて湖水にうつる白カバの林は美しい。あと一時間も北へ向け走るとカナダの国境と云う処までドライヴを続ける。ホワイトマウンテン国立森林地帯をぬけバーマント州へ入る。セントジョンズヴリーと云う処はメーブルシロップで有名な処とか。田舎道はすれ

ちがう車も少いが道路がよいので走っていても快よい。地理にぐわしいマリオンはメーブルシロップはここが一番おいしいと云う店へ行き、紅葉の木からしほり出すシロップで甘くつくられたキャンディなど買った。全米でつかはれるメーブルシロップはここが産地だそうである。丁度紅葉をみられると思つていた私達には一週間ほど天候の具合で早かったのは少し残念であつた。リットルタウンのホテルで一夜を明かした翌朝自動車の屋根に薄く氷がはりついていた。寒くなるから着物もそのつもりでもっていらつしやいと注意してくれた通り、コートの手をたてたくなる冷さであつた。

キャノシ・マウンテンへケープルで登つた時、頂上は早や樹氷でケープルの発着する処にあるカテーシ風の小屋から数歩外へ出た私は息をするのも苦しくなる感じで急いで暑いカテーシへ戻つた。ここで思いがけなく日本人の御夫婦に会つた。シカゴの大学の先生をして居られるとかで二人の子供さんを連れドライブ旅行に來られたと云う。「箱根のスケールの大きい景色と思えばよいですわね」と云

はれた。まさにその通りである。実に雄大な景色である。あちろも思いがけない処で、日本の着物の私をみて非常になつかしさがられた。外国で日本人をみると知らん顔をする日本人の一部の人達の事をきいたり、私もおたがい日本人とおしだからニコッとし様とする顔をそむけた一人の女の人をブロンクスのスーパー・マケットでみかけたけれど、この山でお会いした御夫婦は目礼したあとで、「日本からいらっしやいましたか」と声をかけて下さったのである。スライドをとって戻って来たマリオンを紹介し、思わぬ処で四人で一刻を楽しくすごしたのである。日本人の連の事で気付いた事だが、ワシントンと一緒にグループになって国会議事堂を參觀した時、会社の重役級と見える人達も見えんふりをするのに、ワシントンの美術館でまたますれちがった一人の中年の男の人に目礼され、その上、「こちらにお住いですか」と声をかけられた。そしておたがい旅行者であると分ってからその方は東大の先生と分った。偶然に、日本人とおしでなつかしく声をかけて下さったのは何と教授ばかりであったと

は、この話を最近帰朝された東京大学の教授の奥さんに話しをした所が、「在米の人達は、日本から来る旅行者に色々迷惑をかける事が多いから日本人とみると知らん顔を



ニューハンプシャーからメイン州へ行く白樺並木

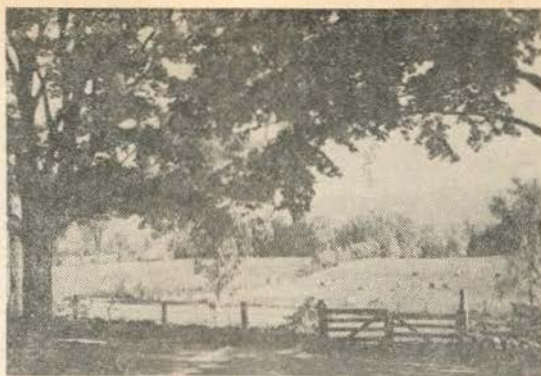
するのよ」と云われた。なる程、そんな事もあるのと初めて知らん顔をする理由が分った。も一人の或る紳士の方は、僕もフランスで向うから小がらな、変なかつこうの人が来

るなと思うと日本人なので恥かしくなって横を向いてしまったと話された。私の場合、はっきりと日本人と分るのだから、二世、三世の人ならいざ知らず、行を共にした小一時間、幾度も後になり先になりして議事堂を見学した時の日本の紳士達の冷い態度は、同国人であり乍な何と心淋しい事であつたろう。帰国して、私宛の手紙の中に、この教授御夫妻から写真同封の御手紙を手にとった時、外国で、しかも山の上で御会いた感激が再び湧き起るのであつた。

山林の中の一青年と戦争花嫁

ニューイングランドの景色は、英国の田園の景色のスライドをみると全く似ている静かな、どちらかと云えば明るさの欠けた感じのする処である。北海道を旅行するアメリカ人の或る人は日本らしくないと云うのはニューイングランドの風景に似ているからである。フランコニアアップチと云う所などは高い山がせまり、細い崖沿いに橋を渡る処など上高地あたりを思い出す。私達の様にドライブして見物に来ている人達は、大たい中年以

上の人達や停年になったと思われる老夫婦が多い。静かなハイウェイを通り、人里はなれた山の中の道を走る。所々山林で大木を大きな機械で伐り倒していたり、工事をしている人



点々と見えるのは牛。ニューイングランド特有の景色

達をみかける。ふとその中に目鼻立ちののった青年が労働服をきて機械を操作しているのを見た。思わずハバンと一人でうなづいてしまった。戦争花嫁がアメリカへ連れかえ

られたら想像とはあまりにかけはなれている田舎住いの家でおどろいたとか、生活環境があまりかけはなれている事で不幸になったとか幾度もきいていた話である。事実ロスアンゼルスで日本料理をこちそうになった時、日本へかえった様な錯覚をもたされるように若い女性がたくさん働いているのを見た。どうしてこんなに日本の女の人をこの料理屋さんは日本から連れて来られたのですかと聞いてみた。その人々は戦争花嫁の不幸な姿であり又幸せであっても経済的に働かざるを得ないで勤めて居られるときかされた。勿論、幸福な生活に入っている人もある。戦争で多くの青年が日本へ来て、その中の何百人かは分らないけれど日本女性を花嫁として連れかえったが幸せとは程遠い生活である。マリオンの横にチョココンとすわって遠い山々、紅葉している林などに目も心もらばわれていた私はふと車窓より目に入った一青年をみて、現実の社会の状態の一つを考えずにはいられない何か心がの一隅に絶えずひそんでいるようだ。目に入って来る景色を楽しむ一方、やはり来てみなければ、分らない外国での生活をたとえ

その一端であっても次々とみて行くのであった。この事について思い出すのはかえりの飛行機の中で会った一老婦人の事である。

エマソン夫妻とお孫さん二人に送られて私は飛行機へのり込んだ。暫く礼状などかいて時間をつぶしていた私はボツンと一人でいる日本の人に気がついた。「おばさん、ここへ来て御話しでもしませんか」と席が空いていたので声をかけて上げると隣へ移って来た。

「奥さんは空港で外人夫妻といらっしゃいましたね」と云われびっくりしてきくと「娘が「カーチヤン、ごらんよ、あの奥さん英語でしゃべってるよ、いいねー」って二人で奥さんをみていました」と云う。それがいと口となり娘さんとはときいてみると兵隊さんと一緒にあったと云う。「私は一年半もサンフランシスコの南にある町に娘夫婦と暮して、ほんとによいむこでよくしてくれました。私の様に招かれた母親と知合いになったけど夫婦げんかをして、子供にゴロベークとかシャラップと云うのをきくと悲しくなつて日本へかえってしまいたいとささ々とかえつた人もいますよ」「ゴロベークとかシャラップって何の

事？」とよくよくたずねたら、子供達に「ねてしまえ」と云う事で「だまれ」がシャラップの意味なのである。水の事は「ワタ」と云う、そう云う言葉で通じる生活の一端がうかがわれる。でもどうも黒人らしい娘さんの御主人は本当によい人らしくアメリカへ渡った娘さんはもう十年以上も幸せに遇していると云う。洋服もくつも皆もらいものですと私に見せていたこのオバサンに「おばさんはお倅せよ」と心から云うことが出来た。空港で私の着物をみて二人でじっとみていたと云う事をきき、その娘さんはきつと日本をなつかしく思っていたにちがいない。それで印象が強くのこり、その人達を気づかなかった私が多またま声をかけたのでおばさんは嬉しくてたまらぬと云った顔で横へこしかけたのである。ホノルルで「おばさん、飛行機まちがえないでね」と云って別れたのである。

娘さんは内職に小さい店をもっているらしい。食事もおみそ汁、タクワンと何でもあつて困らなかつたと云っておられた。外人と云えば仲間の黒人の人達しかつきあえないかも知れないその娘さんの事を思い、私は何か淋

しいものを感じたけれど、あの人なつこい素朴なおばさんとの二時間ほどのおつき合いは私の心にはのほのとしたあたたかいものを持たせてくれた。「ターミナルまで降りて足をのばしていられしい」とすすめ立上った私に「奥さんこのカバンだけはもって行つた方がよいかしら、お金が入ってるんでね」と大きな声で話すので周囲の日本人達が皆ニコ



会員の皆様と共に、さらに「浄土」を発展させるという意図で、会員便りをもうけました。

▼この度小生の知人、御主人に先立たれ、それ以後というものは敬虔なる念仏信仰者として、専心亡夫の供養に勤めておられます。たまたま、先日立派な墓碑を建立され、その開眼供養に招待を受けました席上、「浄土」誌の話を言及、見本としてお見せしました所、いたく感激、是非是非拝読したき由でしたので、何卒御送本下されたく、お願い申し上げます。

(山形 満願寺)

ニコと私達二人をみて笑っていた光景は忘れられない。山林でふとみた一青年の事から新聞でよんでいた戦争花嫁さん達の事を思っていた私は、おばさんの口から出るゴロベエとかシャラップと云う言葉から考え合わせ、気の毒と思う気持はかくせない。けれど幸せである事はよかつたとはつとする気分もまじり実に複雑な思いであつた。

▼「浄土」の見本お送り頂き、久々になつたくしく拝見致しました。二十年位「浄土」は読んでいませんが、それだけに意匠も鑑集も変り、時の推移を思います。あの頃は、中村弁康先生が信仰相談を担当され、滋味あふれるものがありました。昭和十年頃か、増上寺黒本尊前での鑽印会の真野先生の講話と別時の夕に参加したこともあります。また、吉野翠幹氏の二作実感がこに一字一句肝に銘じました。私も浄土を読ませて頂きましょうか。

(北海道 加藤芳明)

▼佐藤治子先生のアメリカ旅行、面白く読ませて頂いています。(神奈川 吉屋信子)

▼拝読させていただきます。(北海道 西迎寺)

三部経の再発見

(一)

須藤 隆仙

(浄土宗教学研究会主宰)

再発見の意味

ここに再発見というのは、これまで誰も発見できなかったものを、私が発見した、というような、恐れがましいことをいうのではありません。

元祖上人は阿弥陀経を釈するのに「文に隠顕あり」といって(勅伝二十四)、文中に隠れた意味のあることを示され、また「われ聖教を見ざる日なし」と仰せられて(勅伝五)、日々經典を誦したもうたことを、伝えておられます。外国にもラインとラインの間を読め、という諺があり、キリスト教のバイブルの発行部数には、いかなるベス

トセラも及ばないといわれます。これら案ずるに宗教の書は、一そう文中の隠れたる意味を発見し、それが日々に新しいものとなっていかなければ、ならないものと愚考いたします。

かかる意味で、私がここにいう再発見も、一般的な新発見ということではなしに、私自身が日々に体感した三部経の有難さ、尊さを独語するのであります。今後毎日一日と新しい三部経が発見されていくことでしょうが、ここでは今日までの私なりの再発見なのであります。

經典の出現



私はこのごろ、お経というものの説かれた因縁を尊く思うのであります。

世間では、まだ大乘の經典は非仏説だとか、いやそうではないとかいろいろの問題で騒いでいるところが、あるようであります。しかしこれらも、いくら騒いでみたところで十年前のことすら真実が明瞭を欠く私達凡夫にあつて、なかなか至難な問題のようであります。

經典の成立ということを学的に取扱うと、釈尊が經典を説かれた、その因縁の尊さが薄らいでしまうようであります。のみならず、場合によっては、經典の誕生について誤った話がつくられてしまうことがあるようです。

浄土の三部經についても、大經は釈尊の意を後代の秀才が成文化したとか、觀經は中國撰述であるとかいろいろ勝手なことをいう人があるようであります。經典を成立学的にのみ見ていると、このように大事なところが一本も二本も抜けてしまうのであります。

大經の出現

大經を問題とする場合、五存七欠といわれるとおり、現存するだけでも五つの異訳があり、それがそれぞれ如来の本願の数が異つたりしているため、いろいろと問題を起し

ているようであります。しかしこれはとんでもない間違いであります。たった一度だけのお釈迦さまの説法が、それぞれに成文化されて、本願が二十四あるもの（大阿彌陀經・平等覺經）、三十六あるもの（莊嚴經）、四十六あるもの（梵本大經）、四十八あるもの（大經、寶積經）、等々に分れた、と解するから、問題が起きてくるのであります。

私はお釈迦さまは、あるときは如来の大慈を二十四願に説かれ、あるときは三十六願にとかれ、またあるときは四十六、四十八、ないしは四十九や五十二というふうに、さまざまに説かれた、と解するのであります。するとならん問題は出てまいりません。阿彌陀如来さまのおいしくしみを、お釈迦さまはさまざまに説いて下された、その中で私達は元祖上人の御指南に随つて、康僧ガイ訳の無量壽經を正依とする、というふうに受けとっていけば、大經の成立学などといって、成文化されたその歴史をせんさくすることなど、全くいらぬものとなりますのであります。

ですから大經は、五つの異訳がある、と見るよりは、五つの同系同質の異經がある、と見ていくのが大切であつて、一原本から多訳が出たのではなく、原本に異經があり、同系の異經、つまりこの場合の『訳經』は中國語に訳された經、という意味で一原本から異訳された『訳經』

という意味ではなく、『中国文字経』の意であって、『同系の中国文字経』というふうに見ていくことが大切であって、断じて一原本の多訳経ではないのであります。

観經の出現

観經には梵本と見られるものが、ないとかで、中国で作製されたもの、または西藏で作製されたもの、などとする説を立てた人もあったようですが、梵本と見られるものが発見されて、やはりインドに出現したもの、ということに落着いたようであります。

大体、観經の説かれた因縁を見ると、インドの王宮でのできごとから出発しており、とても中国などで作製されたものとは思われません。それにこの経は訳経者として有名な菩提流支が、不老不死の仙經より勝るものとして、曇鸞に伝授しており、古来からインド真撰の経として尊ばれているのであり、近代の学説よりも、私は伝統的な真実さの方をとるのであります。

この経が説かれるにいたった王舎城での悲劇について、後に細説しますが、この事件が、浄土の三部経の説かれた時期を見るのに大変重要な役割を果しているのであります。よく法華系の人達が、浄土の三部経は、法華経より

前に説かれた方便経である、と攻撃し、近頃では創価学会が盛んにこの方法で、浄土教を誹謗しておりますが、これは大変な間違いであります。王舎城事件から見ても、浄土の三部経は、法華経の後に説かれた、『法華の結経』であり、のみならず『一切経の結経』なのであります。その詳細はのちに細説いたします。

阿弥陀經の出現

よく『阿弥陀經は一切経の結経』であるといわれます。阿弥陀經は浄土三部の結経でありますから、当然一切経の結経でもあるわけですが、ここでは、この経が説かれた因縁について、一そう「結経」たるの真実を知るのであります。

この経が説かれた因縁については、これまで余り伝えられておらないようであります。古来『無問自説の経』といわれて、たいいていの経は誰か相手があって、その相手にお釈迦さまがいろいろ説かれたものであるのに対し、この経は誰も相手がない、つまり問う人がない（無問）のに、お釈迦さまの方から、進んで説かれた（自説）ものとして、珍しいものとされているのであります。

周知の通りお釈迦さまは、自づから『舍利仏よ舍利仏

よ』と三十数回も弟子舍利仏に呼びかけられて、この経を説いておられるのであります。別に舍利仏が質問したわけでもないのですが、舍利仏に呼びかけられておられるのであります。

ここにこの経が説かれた尊い因縁がふくまれているのであります。それは、この経が説かれて間もなく、舍利仏は死んでいるのであります。お釈迦さまに十大弟子といつて有名な弟子十人がおりますが、その中で舍利仏と目連の二人は釈尊より先きに死んでいるのであります。目連は事故死ですが、舍利仏は病死のようであります。お釈迦さまより三カ月早く死んでいるのであります。自分より早く死んでいく勝れたる弟子のために、お釈迦さまは、阿弥陀経を説かれたのであります。誰も問ひ出した人はないのに、お釈迦さまの方から、浄土の真実を説かれ、舍利仏よ、舍利仏よ、と授けられたのであります。この因縁にたって、この経を読むとき、心は無窮に救われてまいります。舍利仏は智慧第一といわれ、十大弟子の首位にある方でした。その舍利仏のために、早く死んでいく彼のために、この経は説かれたのであります。偉大なる仏道修行者の帰結は、この経によって示されたのであります。

《浄土トラクト》

葵ぐさ

——御法語の乗り(その二)——

村瀬 秀雄著

目次

- 一、自身は凡夫なり(わが身わろして)……………一
- 二、漫心は悪魔に同じ(わがちからにて往生する事ならば)……………四
- 三、念仏に差別なし(あの阿波介も)……………六
- 四、罪人ながら往生す(罪人は罪人ながら)……………八
- 五、生涯弛まむ努力(ある時の給はく、あはれ此度)……………十
- 六、念仏のご利益(およそ五種の嘉誉を)……………十二
- 七、学生と念仏(学生骨となりて)……………十四
- 八、あとがき……………十六



写真の紙表

理想の表現

大和 当麻寺

大和路を廻ったのは数年前の冬であつた。生れつきアマノジャクにできてゐる私は、観光客の少ない季節を選び、全く無計画にフワットでかけた。

静かな都に吹きさらす木枯といひ、崩れた土塀をしっかりとぬらす雪雨といひ、東京住いの私には異様な落ち着きと寂寥感を与え、厳しい寒さも忘れて思うままに旅を楽しむことができた。東大寺・法隆寺・唐招提寺など、それぞれの持つ奥ゆかしさも格別ながら、と

りわけ心をひかれたのは当麻寺であつた。一度は訪ねたいという念願がかなつたことにもよるが、饗の中にほんやりと浮きたつた東西の両塔と、当麻曼茶羅の荘厳な美がポチポチの脳裏に焼きついたのであらう。

当麻曼茶羅は、天平宝字七（七六三）年、中将姫の本願で、一夜のうちに化身の一比丘尼が蓮の糸で繰り上げたという。このロマンな伝説は事実ではないが、おそくとも、平安時代の初めに作られた綴織の曼茶羅であることはいふまでもない。当麻寺は南都興福寺の支配にあつた古い寺であるが、東西の両塔と曼茶羅堂は再三の災難をまぬがれて今日に至り、問わず語りに往時の様相を話してくれる。

奈良・平安時代の仏教は学問的な面が強く、庶民には理解できない貴族的なものであつた。当時の貴族は、生前にその難かしい教理を尊び、死後は極楽往生を願うというのが常であつた。しかし鎌倉時代に入ると浄土教の隆盛とともに一般庶民の間にも広がって行つたのである。この思想とともに、当麻曼茶羅も一層信仰されるようになり、田畑の寄

進はいふまでもなく、参詣する信者でにぎわうようになった。

建保三（一二二五）年、恵阿弥陀仏の発願により複本が作られ、仁治三（一二四二）年には、曼茶羅厨子も修理されて面目を一新した。この時模写した曼茶羅は前に、古い方は裏面の板壁に張られたが、延宝八（一六八〇）年はぎとられ、軸装して保存するようになった。一方文龜本をはじめ模写も盛んに行なわれて全国に流布し、信仰の対象となつた。

近頃テレビや映画などでギャングや愚連隊を主とするものが多いが、これは表現の仕方が簡単であるためであらう。絵画でも地獄の表現は易しいが極楽の表現は難かしい。それをこれだけ巧みに描き上げたものは少ない。

弥陀三尊を中心に多くの菩薩達が左右対称に並んで往生人を迎える構図は、観經の意をズバリと捕え、慈悲に満ちた優雅さを強調している。思うようにならないのが世の中であるが、理想の世界を求めるのは人間の本能である。現代まで生き続けた当麻曼茶羅は、当時の人々に大きな感化と満足をもたせたとことであらう。

鈴木 成元

編集後記

▽除夜の鐘を境に、またまた新しい年を迎えた。場所も気候も、それに時間も、大して変つてはいない。しかし、どことなく清々しく新年の意欲をかきたてられる。一年の計は元旦にある。で、会員諸氏もそれぞれ願志をもちしていることでありましょう。

▽我々編集子も、今年こそはより皆様の御期待にそえるよう張り切っております。そしてその一つとして、会員便り「終業浄土」を設けました。編集子への注問や会員同志の通信なども結構です。要領を簡単に記して編集部までお送り下さい。▽本年正月の巻頭は、増上寺法主権尾平匡先生に御

執筆いただきました。先生は一寸の暇もなく、東に西に、南に北に、仏法弘通の為に精進されておられます。▽本年は卯年である。卯年の人は本年の誕生で、二十二、二十四、三十六……才となるわけですが、丁度これに因んで、仏教大学教授春日井真也先生の「アジアのうさぎの」寄稿がありました。なお氏は、現在インド国立ビスバ・ブハラティ大学教授として在印中でありすが、最近の中印国境問題のインドの状況の状況を次のように書いておられます。

「インドは今最も爽快な季節です。暑からず寒からずですが、今年は国境問題で非常事態の宣言が行われており、カルカッタのチャイナパンクが閉鎖されたり

しています。先日各地を一寸旅行しましたが、大分デモが激しい様です。その直前には学生団とポリス隊とがカルカッタで大乱斗をやリ、市電二十六台、バス十数台が破損され、一筋片側全焼などという大事件があり、その後ヒンドゥスタン工場の労働者三千人とポリス隊の衝突があり……」とインド国内の緊張が知られるようであります。とに角、戦争は防止させねばならぬ。▽めでたさも中くらない。りおらが春。一茶

謹賀新年

昭和三十八年 元旦

浄土 編集部一同

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 一月号

昭和十年五月廿日

第三刷郵便認可

昭和三十七年十二月廿五日 印刷

昭和三十八年 一月一日 発行

定価 五十円

編集人 佐藤 密雄
発行人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区横町一ノ廿一

発行所 法然上人顕仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一七番

大正大学

学長 青木道晃 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穩健中正、操守高き学生を育成する事を目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

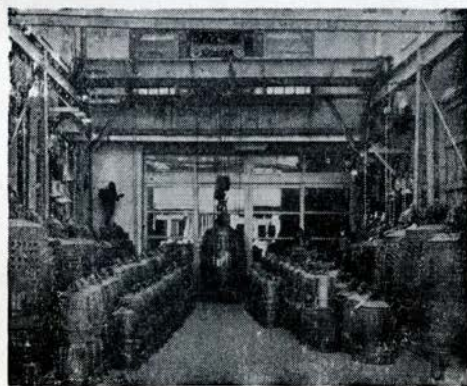
専攻

文学部＝国文学、英文学、史学、西洋哲学、宗教学
中国学、社会学、社会事業の8専攻
仏教学部＝仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の5専攻
大学院＝修士コース、博士コース（仏教学、宗教学、国文学）

昭和38年度1年の募集人員は200名、試験科目は、国語
（漢文をふくむ）社会、外国語（英、独、仏のうち一つ）

試験期日

第1次	2月27日・28日（水・木）	詳細は入学案内
第2次	3月27日・28日（水・木）	を参照のこと



鑄物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

梵鐘（45cm～85cm）
在庫豊富

音喚鐘（12cm～51cm）
響理學博士青木一郎先生
梵鐘界の權威
日展
芸術院賞受賞
参事
香取正彦先生

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田